



静脩

1998年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 35, No. 2

『百万塔陀羅尼』の語るところ

人文科学研究所教授 勝村哲也

人は何千年もの間、ものを書いてきた。その書写の材料として、人が考えついたのは、粘土や石や木や金属に刻むための莖(くき)や篋(へら)や刀や鑿(のみ)と、竹や木や絹や紙に書くための筆やペンであった。このように書写という行為は、「刻む」と「書く」のふたつに限られていたのである。「刺す」つまり刺繍もあるが、例外に属する。

「刻む」というのは、書写対象となるモノに点と線を刻む行為であって、金属に刻む活字や紙に刻む紙型(しけい)あるいは点字の形態をとって現在でもまだ行われている。タイプライターも同類で、キーのヘッドに鑄込まれた活字を叩いて紙に字を書く。

「書く」のは、墨や顔料を含む広義のインクの使用によって普及したのであって、今日では書くといえば、普通はこの行為を意味する。もっとも角筆とよばれるペンによって、インクを用いずに紙に書くとか、棒切で砂に書く方法もあるが、これはむしろ刻むに近い。

ところが、20年あまり前に、コンピュータやワープロによってものを書くことが始まった。電子の字、いわゆる電字の登場である。書写対象となるモノは、見かけからいえばディスプレイ上にあるが、媒体とよばれる磁気テープ、フロッピーディスク、光磁気ディスクといった

人工的に作り出された新物質に写し取って、紙に転写することもできる。コンピュータで書写される媒体は、モノとして存在するので、何となく理解できるとしても、その



モノの上にもどのようにして電字を書くのかの説明は、何しろ目に見えない電子が相手なので、なかなかやっかいである。ごく簡単にいうと、電字というのは、一つ一つ固有の概念(もっとも基本的なのは形)が与えられた文字を、記号と数式で構成し、コンピュータ可読とした文字のことである。この電字を使って、私達はどのような文献でも書けるようになった。漢字も例外ではない。人文科学研究所の私のホームページから公開している「ekanji」は、いわば電子漢字の活字棚で、まだ型(フォントタイプ)は限られているが、字種は6万5000、来年の今頃までには8万7000まで収容しているはずである。「ekanji」利用者の仕事は、文選と植字を、電子漢字の活字棚を使ってパソコン上で行うこと

だといえ、より分りやすいであろう。

いま、コンピュータで文字を書くための研究と、電子漢字利用のための国際的な環境づくりに専念している私が、思考の回路を千年の昔にあわせ、イメージーションをたくましくして文字の世界に遊ぶとき、想起するのは、少し歪な形をした附属図書館蔵の『百万塔陀羅尼』の姿である。

突拍子もないと思われるのを承知の上で、話を進めると、わが国最古の印刷物といわれる『百万塔陀羅尼』の製作過程を、最新の技術を援用して解こうとするとき、この眼前にある附属図書館蔵の陀羅尼は、私の想像力をいたく刺激し、藪内清、藤枝晃両名誉教授がお採りになる木版印刷説を否定する方向へと、誘導するのである。

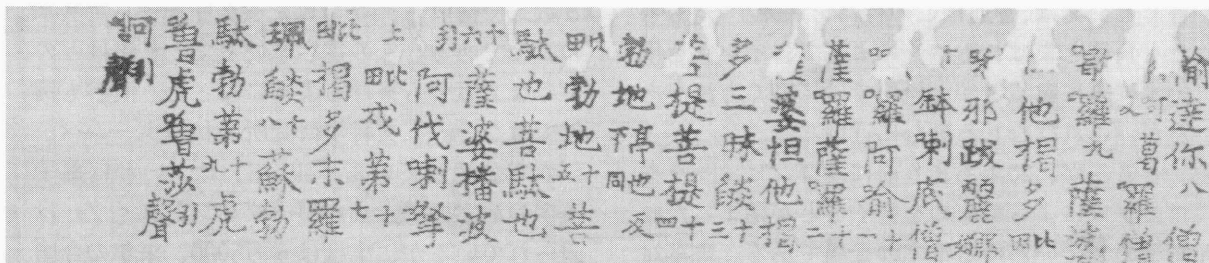
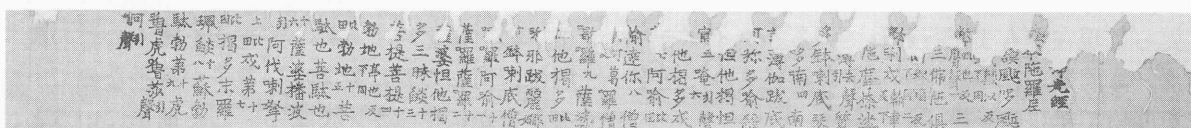
版の上に紙をあてて刷るのを印刷(プリント)、紙の上に版を押しあてるのを捺印(スタンプ)というが、附属図書館蔵の陀羅尼(根本陀羅尼経、短)は、本文にあたる経文の丁度半分のところで二段に割れるような歪みが生じている。写真ではよく確認できないことを恐れるが、最下段の文字のラインが少し、左肩上りになっている。このようなラインの歪みは捺印のときに顕著で、スタンプラインと称している。またよく見ると、捺印のときに生じる墨の落下跡がある。スタンプラインは、各行の文字の重心を結

ぶこと等によって計算が可能であり、小さな版は1, 2行、大きい版は7~9行、10~12行程度であることが確められそうである。墨跡は版面に陽刻された文字の中の小さな閉曲線内に墨が付けられた場合に起るとみて、その出現頻度を統計処理することによって、捺印の証明が可能である。

わが国の百万塔陀羅尼より少し古く、世界最古の木版印刷物とされる韓国出土の陀羅尼も写真で見ると捺印と判断される。そうなるとこれらは、厳密な意味で最古の印刷物と言えないのだろうか。

およその見通しを述べれば、否である。天理大学図書館蔵六度陀羅尼経等に認められる版の回転によって生じたと断じざるを得ない痕跡、何らかの回転によって生じたと思われる紙の上端あるいは下端の墨跡、経巻が継紙(つぎがみ)の後に捺印された事実等を突き合わせているうちに、『百万塔陀羅尼』は銅板の輪転機で印刷したのではないかという想いが湧きあがってきた。墨跡を眺めながら、それが銅板用の油を含んだインキであることをどのようにして検証するか、DNA鑑定ができればよいが、許可がおりるかどうか、次なる課題に頭をめぐらせているところである。

(かつむら てつや)



京都大学附属図書館蔵根本陀羅尼経(短)

ネットワーク時代の図書館サービス： アメリカ大規模大学図書館見学記

①スタンフォード大学

附属図書館参考調査掛 山中節子

1. はじめに

「平成10年度京都大学後援会助成金第Ⅰ類第Ⅰ種（海外派遣）」の助成によりアメリカの大学図書館を見学する機会を得た。訪問先は、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校（UCB）、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の3校、期間は7月1日から2週間であった。また、時間の合間を縫ってサンフランシスコ公共図書館、ロサンゼルス公共図書館、カリフォルニア工科大学図書館を見学することができた。

見学の準備に当たって、まず相手先機関への訪問依頼や打ち合せを行う必要があった。毎晩、英文手紙文例集を右に、英和・和英辞書を左に置いてむりやり英文を作り、主にe-mailで連絡をとった。どの大学の図書館員も大変親切で迅速に対応してくださり、こちらの見学の希望を汲み取ろうとしてくださったのが大変嬉しかった。決して英語が得意でない私にとっては大変な作業だったが、このような準備自体も研修になり意義があったと思う。また、事務諸手続きでは京都大学後援会、国際交流課の皆様をはじめ、附属図書館の関係者一同に大変お世話になった。紙面を借りてお礼を言いたい。

2. スタンフォード大学図書館の概要

スタンフォード大学は1891年に創立された私立大学である。研究図書館であるGreen Library、学部生用図書館のMeyer Libraryと分館が13あり、他にHoover Institution Library and Archives等の5つの図書館がある。スタッフは合計560人を超え、蔵書数は図書資料約670万冊、他資料9,830万点にのぼる。

組織はStanford University Libraries (=SUL) といういわゆる図書館組織のほかに、学術研究を技術的に支えるAcademic Information Re-

sources (=AIR) という部署があり、この二つが一体となって教育・研究活動を支援している。このAIRの下にあるコンピュータサービス機関とその施設の幾つかがMeyer Libraryに置かれており、情報処理教育の一翼を担っている。

私は今回、Green Library, Meyer Library, Music Library および Archive of Recorded Sound と Engineering Library を訪問することができた。見学申し込みはスタンフォード日本センターを通じて行ない、センターのスカラーであるマリア豊田氏が現地の図書館員の方に連絡をとってくださった。日本センター理事長の今井賢一教授をはじめスタッフの皆様、豊田氏、スタンフォード大学図書館員のAssunta Pisani氏、Karen Nagy氏には特にお世話になった。本当に感謝している。そして当日お会いできた図書館員の皆様に対して心よりのお礼を申し上げたい。

3. ホームページ

まず、各館の見学で共通して印象に残ったことを述べたい。

スタンフォード大学図書館では前述のSUL/AIRという組織全体で非常に整ったホームページを作っている。そこから、OPACやデータベース、電子ジャーナルといった電子資料からの情報、各図書館や各主題に関する情報を効率よく入手することができる。

実際、各図書館を見学した際に、本館・分館にかかわらずどの図書館でも同じページを使って説明をしてくださった。まさに、必要な情報への入口の役割を果たしている。

4. 学部生用図書館

次に、最初に見学した学部生用図書館について報告したい。

Meyer Library は、ビデオ、カセットテープ、レーザーディスク等の各種メディア資料と学生用図書、コンピュータを置いた学部生用のマルチメディア図書館である。夏休み中は午後から開館とのことで、私が見学した午前中は利用者がおらず雰囲気が分からなかったことが少々残念だった。

3階建ての建物の1階にはビデオ等の書棚と貸出カウンター、2階には300台を越すコンピュータ端末が設置されている。図書は3階に置かれている。この見学では主に2階を詳細に案内していただいた。

2階は、前述したコンピュータ関連施設が置かれている。ビデオ・オーディオ視聴覚コーナーのほか、学生が自由に使える端末コーナー、フレキシブル・クラス・ラボ、マルチメディアスタジオ、コンピュータクラスルーム、語学授業用ラボ（改装中）、職員研修用ラボとテクノロジー・サービスデスクがある。単に端末を置くだけでなく、様々な目的に使用されることを想定して各部屋や機器が用意されている。カラスキャナー、ビデオ編集用機器、音楽編集用機器も設置され、まさにマルチメディアに対応しているといえる。コンピュータはマッキントッシュとウィンドウズの両方が置かれていた。広々とした空間に、多くの端末が点在している様はまさに圧巻であった。

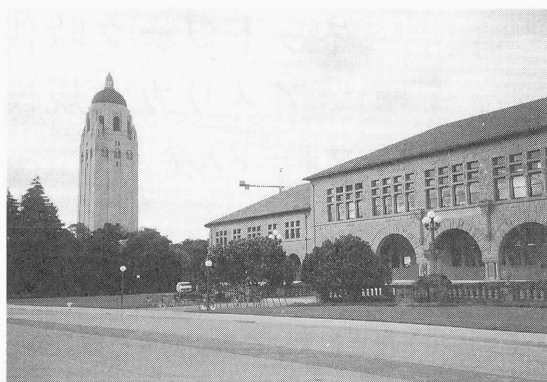
案内していただいた方に端末数が非常に多いですねと感嘆して言ったところ、確かに多いがその分経費がかかると言われていたことが身にしみた。

また、機器だけでなく端末台についても配慮がなされていて、例えば学生用の端末台は職員研修用のものよりも横幅の広いものが使われている。

フレキシブル・ラボやマルチメディアスタジオの写真が、以下のWebページに載っているので参照されたい。

<http://rits.stanford.edu/rooms/flexlab/flex-photos1.html>

<http://rits.stanford.edu/atss/at1/vr/index2.html>



5. 研究図書館

次に Green Library を見学した。

この図書館は学術研究用のメインライブラリーで、蔵書は人文社会系を中心に構成されている。また、6000タイトルの雑誌と140タイトルの新聞やマイクロフィルム・コレクションを蔵している。

ここでは主に1階の検索コーナーと参考調査室、2階の書架を見学することができた。

1階入口の左手は目録コーナーとなっていて、検索用端末と目録カードが置かれている。端末は約20～30台あった。一人用のキャレル風の端末台が全面に設置され、スタンディングタイプが目録カードの間に点在していた。

1階中央部には参考調査カウンターがある。その奥に参考図書が置かれており、単体利用のためのCD-ROM 検索端末が2台用意されていた。CD-ROM は単体利用のものからネットワーク利用になるべく変更していきたいとのことだった。

利用者からの問い合わせはe-mailでも行われている。ホームページには主題別に参考資料の解説や、e-mailを含む問い合わせ先が案内されている。また、“Ask a Librarian”というWebページには質問票が用意されている (<http://www-sul.stanford.edu/cgi-bin/asklib.cgi>)。

検索結果の印刷に関しては、スタンフォード大学だけでなく後に行った図書館でも、無料で印刷して良いとしている場合は何枚までとの制限を明示していたり、ラインプリンターを置いて

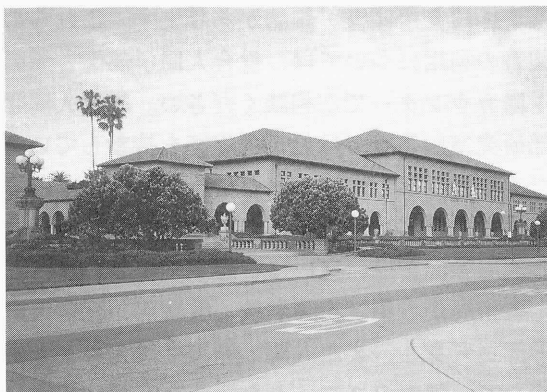
であった。だが、概ねカード式やIDで管理して課金する方式になっていたり、有料化予定という状況で、ともかく有料化する方向が見取れた。

6. OPAC とデータベース

スタンフォード大学図書館のOPACはSocratesという名でtelnetで提供されている。またWeb版のSocratesⅡも同時に提供されている。telnet版は、他のデータベースと同じ画面で利用できることやSocratesⅡよりも情報量が多いという利点があり、図書館員の方も薦めておられた。ただ、学生はWeb版の方が簡便なので好んでいるとのことだった。

このOPACの他、各情報検索データベースを提供するFOLIOと、カリフォルニア大学のデータベースMELVYLが利用できる。FOLIOにはINSPECやGeoRefなどZ39.50プロトコルで統一される25のデータベースが含まれる。データベースは図書館の館内からの接続でもID・パスワードが必要なものもある。

また、電子出版プロジェクトとして、High Wire Pressの紹介を受けた。これは、理工系の学協会雑誌を電子化して提供する出版事業のことで、全米の大学ではスタンフォードが初めて行なった事業とのことであった。



7. 分館の様子

次に、Music LibraryとEngineering Libraryについて報告したい。

Music Libraryは音楽関係の図書・雑誌・楽譜やビデオ・マイクロ資料等の各種資料を収集・提供している。

参考調査は午後の数時間のみ行われており、時間外の質問はカウンターにある参考質問用紙に記入しておく。図書館員の方にe-mailでの参考質問について伺ったところ、一日に2~3件あるが、学外から答えにくい質問もあり、回答に要する時間は様々であるとのことだった。

同じ建物内にArchive of Recorded Soundという部署があり、レコードやオーディオテープの収集、保存、提供を行なっている。古い資料は、利用にあたって職員がテープにとり、そのテープを貸出している。寄贈資料も多く、整理中のレコードが山と積まれていた。

また、蓄音機からレコード、CDに至る再生機器が用意された部屋も見せていただいた。機器の整備は専門業者が行なうらしいが、図書館員もレコード針の交換等を行なうということであった。様々な再生機器を見ていると、デジタル資料に関しても同様に再生機器の保存が必要ではないかとの議論があったことをふと思い出した。

Engineering Libraryは図書資料のほか、カレントジャーナル1,800タイトル、モノグラフ45,000冊、学位論文5,500冊を所蔵している。学位論文は開架書架に製本されて誰でも見られるようになっている。

図書館1階では9台の検索用端末のほか、ビデオ再生機器が20台設置されており、授業を録画したテープを見ることができる。他に各階にも検索用端末がある。

貸出・返却カウンターは学生アルバイトが行なっていた。アメリカの大学図書館では、一般に昼間の開館時でも貸出・返却カウンター、書庫の入庫チェック、インフォメーション等で学生アルバイトが活躍している。

ところで、MELVYLで所蔵検索から雑誌の全文を見る手順を図書館員に説明していただいた時、ちょうど日本の雑誌があったのでそれを選んでくださったのだが、日本語が文字化けして解読不可能であった。日本語のままで海外に情報発信する難しさを実感する体験だった。

8. 終わりに

スタンフォード大学図書館を見学して非常に

強く感じたことは、とにかく全体的によくまとまっているということだった。それは、開学時の建築様式を大事にして、後から作った建築物も同じ様式で建てるという大学の方針にも象徴されているように感じた。

スタンフォード大学では、総勢8名のスタッフの方にご説明いただいた。皆さん、説明の途中で何度も質問する機会をくださったのが嬉しくも苦しい体験だった。とっさに質問はないかと言われて英語が出ず困ったり、施設の素晴ら

しさに圧倒されて日本語さえ浮かばなかったりもした。

誌面の都合で報告できなかったことが多々あるが、Web ページ上でスタッフの報告書や講演記録等の様々な情報が公開されているので、ぜひ一度ご覧いただきたい。そして、私の理解の誤りをご指摘くだされば幸いである。

(やまなか せつこ)

(スタンフォード大学図書館

<http://www-sul.stanford.edu/>)

総合人間学部図書館紹介 —シリーズ「京都大学図書室巡り」

総合人間学部は、京都大学で一番若い学部です。平成4年度までは教養部でしたので、図書館は教養部図書館として教養部生に親しまれていました。しかし、学部となった現在でも総合人間学部図書館は全学の利用者に開かれた図書館であることは変わっていません。入館して本を借り出すための利用証(学生証)は附属図書館と同じものですし、全学共通科目用の参考になる図書等、約5万冊を1階の開架閲覧室で自由に手にとって見られる様に提供しています。

また、1階の開架室にはそのほかに「学部図書コーナー」があり、総合人間学部の教官が各自の専門分野に密着した推薦書を選定して配架しています。人文・社会系、数理系の新しいユニークなコレクションとなっています。国際文化学科のコーナなどには洋書も多数配架しています。これらの新刊書も勿論、全学の誰でも借り出すことができます。貸し出しを受けられる冊数は附属図書館とは別に学部生は5冊2週間、院生は10冊1ヶ月借り出せます。更に書庫には約20万冊の図書、雑誌があり、これらも学部生5冊2週間、院生30冊を1ヶ月以内で借り出

すことができます。

他に1階には視聴覚室があり、語学学習用のテープを聞くことができます。また、38ヵ国語の語学テープは一晩だけの館外借り出しができます。

学部としては一番若くても、歴史的には第三高等学校を継承しています。特殊な資料として舎密局から三高にいたる貴重な文書類を三高資料室に保管し、公開しています。

総合人間学部図書館の他に各研究室には約37万冊の研究用図書・雑誌があります。これらの図書の利用については、総合人間学部図書館の1階カウンターでご相談ください。総合人間学部研究室図書室では相互利用証を持参していただくと借り出しができる場所もありますので、総合人間学部以外の学部の方は所属なさっている部局の図書館(室)にご相談ください。

舎密局から第三高等学校、教養部、総合人間学部と変身し、また人間・環境学研究科とも密接な若い学部のユニークな蔵書を有効に利用してください。

(総合人間学部参考調査掛長 堤 美智子)

平成10年度大学図書館職員長期研修に参加して

附属図書館受入掛 島 文子

大学図書館界では、表題の研修のことを「長研（ちょうけん）」と呼び慣わしています。これに参加したことのある人（長研経験者）にとって、長研は一種独特の意味を持つものようです。例えば、「〇〇さんとは長研の同期で、…」と会話が始まる場合は、その人たちが並々ならず親しい間柄であるということを示しています。また、その語り口には青春の日々を懐かしむような追憶が込められていることが多いのです。「長研」は何か輝かしい連帯感を呼び覚ます符丁のようで、私もいつかは経験してみたい…と、ひそかにあこがれていた研修でした。その長研、大学図書館職員長期研修に今年参加させていただけることになり、わくわくしながら3週間の研修へと出立しました。

今年度の大学図書館職員長期研修は7月13日から31日までの日程で行われました。参加者は国立大学（国立機関含む）35名、公立大学1名、私立大学6名の総勢42名です。思慮深そうな男性陣と元気でにぎやかな女性陣の組み合わせで、緊張の中にも楽しい雰囲気です。研修初日が始まりました。1週目はつくば市の図書館情報大学、2～3週目は東京のオリンピック記念青少年センターが主な講義会場ですが、その他にも筑波大学、東京大学、慶應義塾大学、国立国会図書館、国文学研究資料館、東京工業大学図書館などさまざまな見学コースが設けられています。講義の内容は、電子図書館のような図書館界のトレンドな話題から、上手なマニュアルの作り方や職場での健康管理まで、バラエティ豊かなものです。なんだか久しぶりに学生気分がよみがえってきました。

ところがうきうきしていたのもつかの間、グループ討議の日がやってきました。私の討議テーマは「さまざまな媒体の資料収集の在り方と不足する図書館面積への対応について」というものです。この中で、全国の大学図書館の深刻な実態を聞くことができました。例えば、大学改組で部局に置ききれなくなった資料が図書

館にどんどん運び込まれ、書架の間に積み上げてある話。歴史ある書庫があって、毎年資料のカビ取り作業に追われる話。100年もつはずのマイクロフィルムの部屋に入ると、つんと鼻を突くにおいがする話。資料費削減と雑誌価格の上昇のために学生用図書がほとんど購入できなかった話。大学改組のたびに数万冊の図書の供用換を繰り返す話… などなど。驚くようなものもあれば、共感するものもありましたが、なかなか解決方法の見だしにくい問題ばかりです。利用者によりよいサービスを提供しながら、効率的な管理をしていくにはどうすればいいのだろうかという図書館員としての苦渋が、どの人の表情からもにじみ出ていました。さらに、私には運良く（！）記録者役が当たっていたので、この討議の後、報告書づくりにも四苦八苦することになりました。

長研が3週目に入った頃から早くも、連絡先名簿を作ろう、同窓会を作ろうという声に参加者の中から出始めました。グループ討議や懇親会や夜の交流会などで参加者どうしが急速に親しくなっていました。みんなで何をやっても愉快で、会話にも笑いが絶えません。「こんなに楽しい研修は初めてだな（来週職場に復帰しても大丈夫かしら…）」と考えるようになったときから、私はきっと「長研経験者」の仲間入りをさせてもらっていたのでしょう。「仲間づくり、ネットワークづくりをしっかりとやってきなさい」という研修出発前にいただいた職場の上司のおことばを、心の底からありがたく感じました。

例年この時期は猛暑が続き、講義も見学も暑さとの戦いと聞いていましたが、なぜか今年は非常に涼しくさわやかな天候でした。ことに長研最終日は抜けるような青空が広がっていました。講義室の高い天窓から見えたすがすがしい空の色は、楽しかった長研の3週間の出来事とともに、私の一生の思い出になると思います。

（しま ふみこ）

電子図書館を使ってみませんか

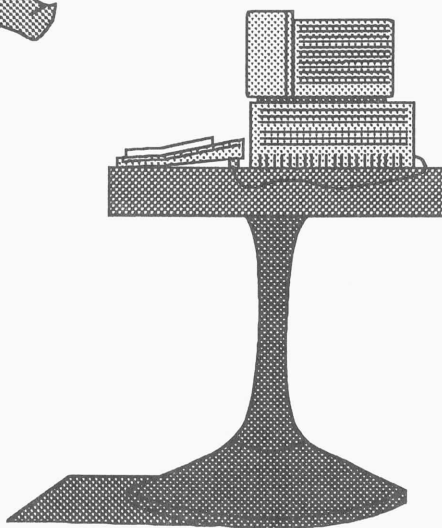
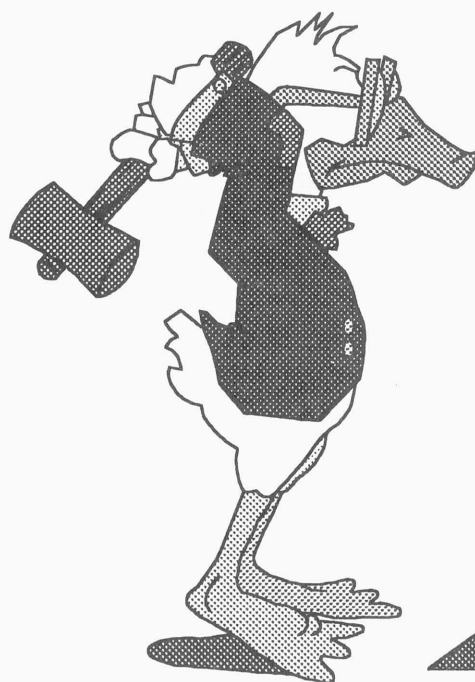
—利用の手引きシリーズ—

附属図書館ホームページに京都大学電子図書館へのリンクがあります。

電子図書館では文献データベースとしてMEDLINE、GeoRef、PsycLit、Biological Abstracts、Chemical Abstracts、電子ジャーナルはElsevier Electronic Subscriptionsを35誌、ネットワーク版CD-ROMは雑誌記事索引、朝日新聞記事見出データベース、広辞苑、Oxford English Dictionary IIを用意しています。

文献データベースは、利用者登録が必要なものもあります。Chemical Abstractsは京都市域キャンパスのウィンドウズパソコンからのみ利用できます。

ネットワーク版CD-ROMをご利用いただけるパソコンは、ウィンドウズ搭載機種のみです。マッキントッシュではご利用いただけませんので悪しからずご了承ください。



電子図書館がうまく使えない時は

コンピュータを壊す前に
附属図書館電子情報掛に
一度相談してみてください
内線 (2618/2619)

意外と簡単に使えるよう
になるかもしれませんよ

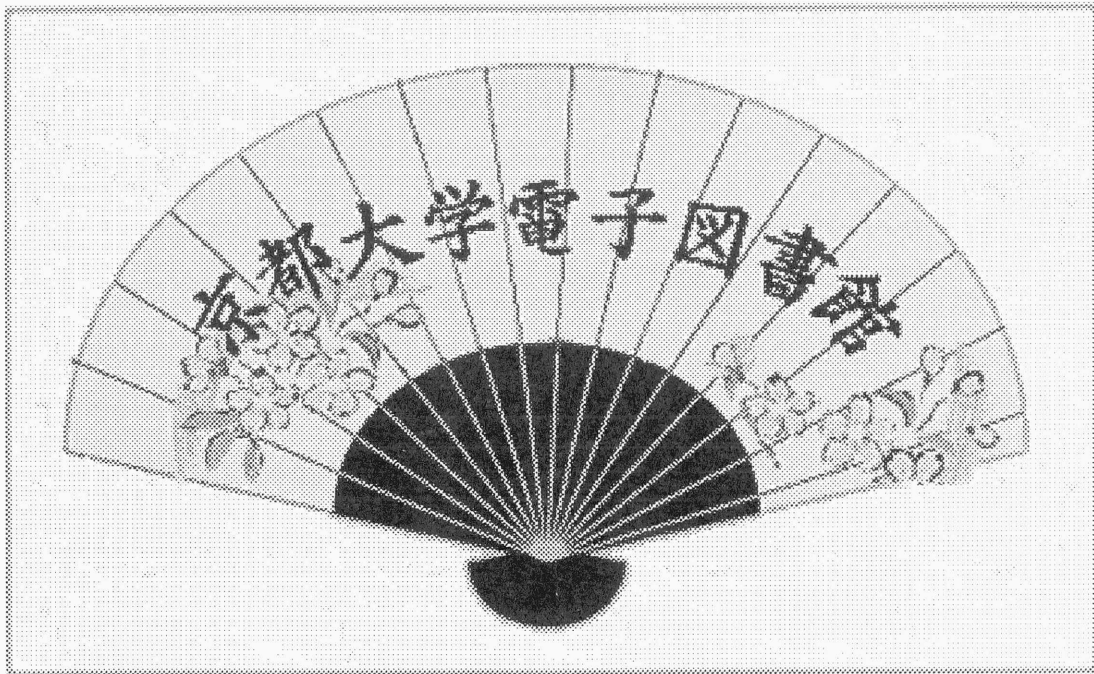
ネットワーク版CD-ROMを利用するにあたっては、端末側の設定が必要になります。Web上のネットワーク版CD-ROM「検索ソフト(初めての方はこちらへ)」のご注意をご覧になり、利用マニュアルにしたがって設定してください。

ネットワーク版CD-ROMを利用するにあたっては、Windowsログオン時、Microsoftネットワークへのユーザ名およびパスワードは「cduser」と入力してください。

附属図書館のホームページ <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>

京都大学電子図書館のホームページ <http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp>

(薬学部図書掛長 渡邊 誠)



京都大学電子図書館
総合案内

電子化資料

貴重資料

今昔物語集(鈴鹿本)
重要文化財
貴重資料
維新資料 / 人名解説

特殊文庫目録

蔵経書院本目録

京都大学百年史

部局史編

検索

検索

電子資料検索
Web情報検索
蔵書検索(OPAC)

文献データベース

MEDLINE/GeoRef/PsycLit
BA (詳細は 農学部図書室のHPへ)
CA on CD (化学分野)

電子ジャーナル

利用登録(初めての方はこちらへ)
タイトルリスト

ネットワーク版CD-ROM

検索ソフト(初めての方はこちらへ)
雑誌記事索引
朝日新聞記事見出しデータベース
(CD-ASAX)
Oxford English Dictionary II
広辞苑 第4版
CD-ROMソフト一覧

電子図書館専用ブラウザ

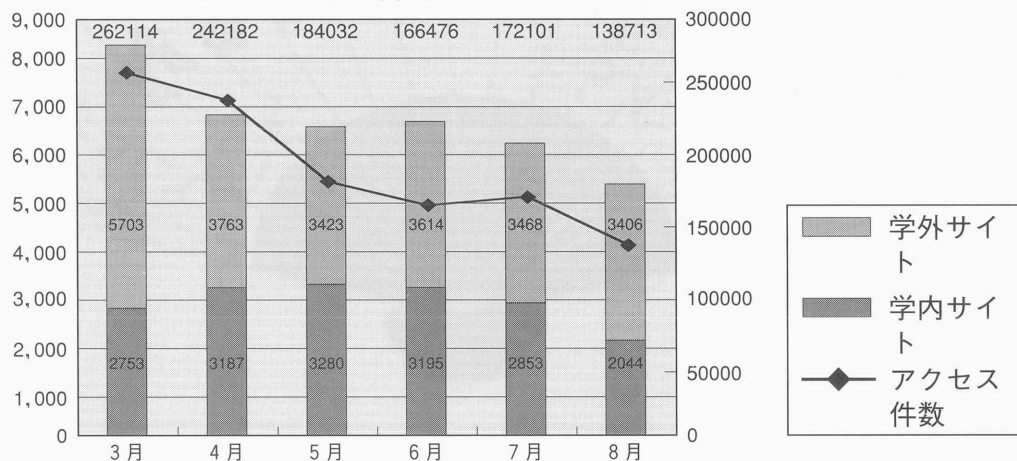
InfoBrickの世界をお楽しみください



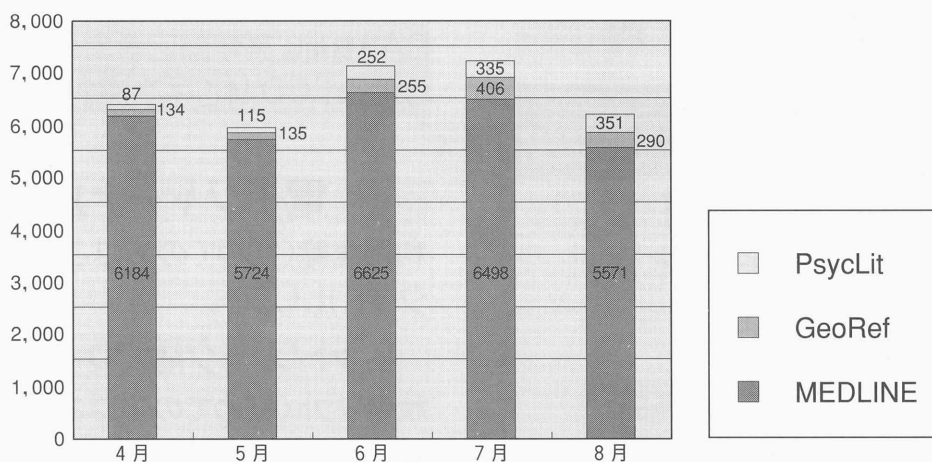
附属図書館ホームページへ

電子図書館ネットワーク利用統計 (情報発信・配信)

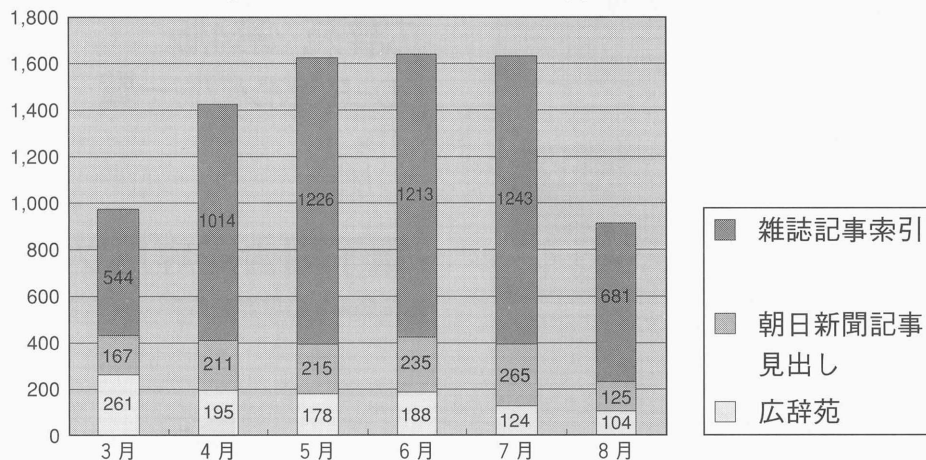
1. ホームページアクセス件数



2. 学術情報配信アクセス件数



3. ネットワーク版CD-ROMアクセス件数

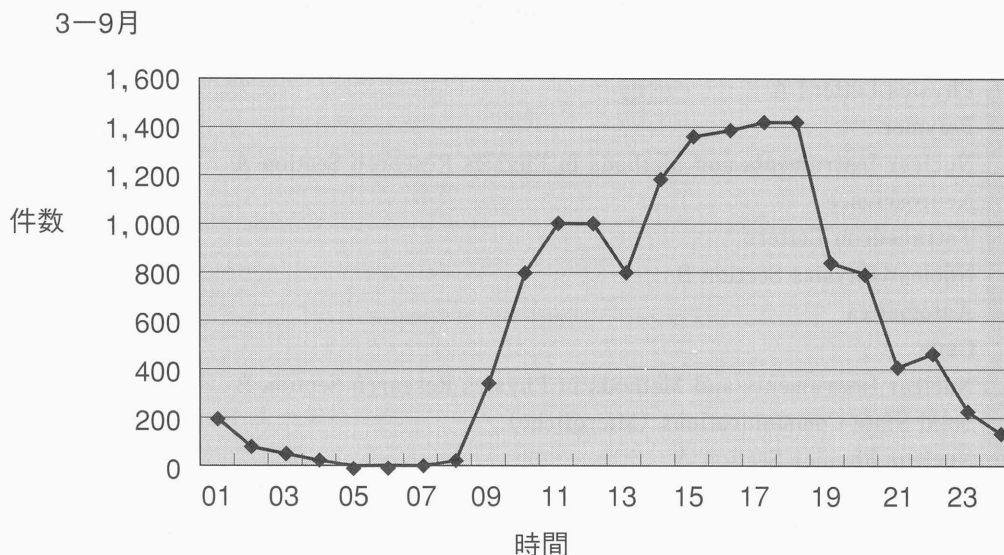


4. オンラインジャーナル利用状況 (1998.3-9)

タイトル別利用件数

	Journal Title	Count
1	Acta Psychologica	1,217
2	Physics Letters A	1,098
3	Polymer	1,095
4	Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section A	927
5	Neuroscience	721
6	Tetrahedron Letters	720
7	Nuclear Physics Section B	628
8	Automatica	604
9	Gene	594
10	Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B	579
11	Solid State Communications (Microfiche)	534
12	Nuclear Physics Section A	509
13	Physics Letters B	453
14	Trends in Cell Biology	448
15	Vision Research	409
16	Trends in Ecology and Evolution	407
17	Trends in Biochemical Sciences	397
18	Trends in Genetics	327
19	Brain Research Reviews	307
19	Journal of Chromatography A	307
21	Molecular Brain Research	295
22	Phytochemistry	274
23	Pain	242
24	Biochemical Pharmacology	240
25	Earth and Planetary Science Letters	205
26	Journal of Public Economics	188
27	Applied Catalysis A: General	184
28	Lingua	145
29	BBA-Reviews on Cancer	144
30	Cognitive Brain Research	139
31	Developmental Brain Research	138
32	Journal of the American College of Cardiology	114
33	Tectonophysics	110
34	Geochimica et Cosmochimica Acta	69
35	Personality and Individual Differences	42
36	Water Science and Technology	40
37	Computer Methods in Applied Mechanics and Engineering	37
38	Neuropharmacology	34
39	Journal of Non-Crystalline Solids	15
40	European Journal of Operational Research	14
41	Long Range Planning (Microfiche)	12
42	Journal of Inorganic Biochemistry	6

オンラインジャーナル時間帯別利用件数



目 次

『百万塔陀羅尼』の語るところ	1
ネットワーク時代の図書館サービス：アメリカ大規模大学図書館見学記	
①スタンフォード大学	3
総合人間学部図書館紹介－シリーズ京都大学図書室巡り	6
平成10年度大学図書館職員長期研修に参加して	7
電子図書館を使ってみませんか－利用の手引きシリーズ	8
電子図書館ネットワーク利用統計（情報発信・配信）	10

編集後記

今回のリプレースで全学図書室（館）に320台の端末が配置された。図書館業務が全てにわたり機械化されている。もう機械に強い弱いと言っておれない環境になってきた。ちょっと前までは文章を考えるのに、紙と鉛筆をいじくって構想を練ったが、今では、紙と鉛筆では何も浮かんでこない。まず端末の前に座って、好きなようにキーボードを叩いて文章を作っていく。日常慣れた業務の機械操作も分かる。それでもコンピュータが分かっているわけではないので、新しいソフトを使うときや、環境が変わるときは一大決心がいる。

新聞に91才の男性が、インターネットを活用しているという記事が出たりすると、多少年がいても現役の身としては「逃れられないいなあ」と思いつつ端末に向かっている。（み）